

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nsk.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《ペンテコステメッセージ》

人を活かす霊の導き

司祭 バルナバ 前田 良彦



聖公会神学院に在学していたころ、3年次になると「説教」が必修科目に入ってきます。説教の先生は、関田寛雄先生（日本基督教団・青山学院教授）でした。毎週テキストが与えられて、神学生はテキストを踏まえてレポートを提出します。そのレポートについて関田先生が講評する形でした。

新学期が始まり、最初の課題は「聖霊降臨」があたりえられたのです。もう40年以上前のことで、詳しい記憶は薄れているのですが、関田先生から「前田君はどの人ですか？」と授業の冒頭に発言があり、恐る恐る手を上げて起立しました。「今回の説教演習の中で一番良い説教です」とおっしゃられ、私もクラスメートも「まさか?!」と思ったことを思い出します。

説教の組立の中心に旧約聖書の創世記11章の「バベルの

塔」を置き、当時の祈禱書の聖霊降臨日の使徒書、使徒行伝2章1節～11節をテキストに用いました。当時の祈禱書は文語で聖書日課に旧約聖書を用いておりませんでした。なぜ旧約聖書をテキストに用いたのかというと使徒行伝（使徒言行録）には言葉が回復される記述があったので、言葉が分裂する場所を探したところ「バベルの塔」にたどり着いたことを思い返しています。

聖霊がどのように働いているのか、どのような時に聖霊を求めるのか、というようなことを考え、思いめぐらすことが多いのかも知れません。父と子と聖霊のみ名によつて、と祈ることも多いでしょう。聖霊は目に見えず、その存在に触れることも出来ません。どこからやってくるのか。聖書にも祈禱書にも聖霊の言葉がいくらでも出

てきます。

けれども、聖霊の働きがなければ到底考えられないという体験をした方も多いのではないのでしょうか。私はかつて「いのちの電話」のカウンセラー研修を受け、カウンセラーとして実際に深夜の担当をしておりました。夜の8時から朝の8時までが担当でした。ある時に呂律の回らない人からの電話がありました。お酒に酔った電話ではないようでした。長い電話になりました。

電話の向こう側の声は時々沈黙となり、寝てしまったような雰囲気があります。そこで、大きな声で呼びかけると反応がありました。そこでユツクリと語りかけ、なぜそんなに眠いのか、どうして「いのちの電話」に電話をしたのかを聞き出すように電話の対応方法を切り替えたのです。睡眠薬を大量に飲んだことが分かりました。「何をすれば、いいのか」と電話をしながら考え続けました。カウンセラーは複数人での当番になりますので、隣のブースで電話に対応していたカウンセラーにメ

モで緊急事態を告げ、事態をどのように受け止めたらいいのか相談をしました。その時のカウンセラーはベテランのFさんでしたので、通信先を探るために緊急電話をして事情を告げ逆探知してもらったのです。やがて、10分後くらいに電話の向こうから「いま保護したので大丈夫です」という声が聞こえてきました。この電話が終わって、やがて朝がやってきました。夜の電話は長いことが多いのですが、この電話は本当に緊張して胃が痛むような出来事でした。この電話を担うことが出来たのは「聖霊の働き」ではないのかということ以外に思い浮かびませんでした。

聖霊は「助け主」とも言われます。ヨハネ福音書の14章全体をお読みください。聖霊がどのように私たちと関わってくださるか。また「助け主」として支えて助けてくださる記述があります。皆さんにも「助け主」が働いていることを思い出せてくれることでしょう。

(聖マーガレット教会牧師)

特集 聖公会関係学校の聖書授業 立教池袋中学高等学校

チャブレン 司祭 市原 信太郎

わたしの勤務する立教池袋中学校・高等学校では、現在各学年とも週1時間「聖書」という授業を実施しており、聖書科教員2名とチャブレンの計3名が2学年ずつを持つという形で担当しています。それぞれの教員が専門性や興味を自由に発揮して授業を行っており、歴史や哲学などに近い内容となった



り、あるいは映画を鑑賞したり歌を歌ったりと、授業内容にはバリエーションがあり、学年が上がる中であるべく異なる教員の授業を経験できるように配慮されているあたりは、他教科とは事情を異にする特徴かも知れません。

聖書科の大きな方針の1つは、礼拝と授業を一体として行うということです。本校では、週に1回各学年ごとの「学年礼拝」を実施しており、この礼拝はチャブレンに聖書科の教員1名が加わり、教話も交互に担当します。授業の内容に教話で言及したり、逆に礼拝で行ったこと

を授業の中で取り上げたりということもあり、両者が有機的なつながりをもって行われていることは本校の特徴といえるでしょう。

わたし自身の授業内容について少しご紹介します。これまでは、中1と高3という、「入口」と「出口」の学年をチャブレンが担当するという形が続いてきました。(今年は校内の事情により、担当学年が変わっています。)

中1は、まず「聖書」という授業に興味を持ってもらえるように、「ドラえもん」や「魔女の宅急便」、「千と千尋の神隠し」といったアニメを教材に用いて、そこから聖書の内容に結びつけていく形で授業に入っていきます。その中から、神に創造された「わたし」がいのちをい

ただいて生きていくということを、様々な形で考えてもらうアプローチをしています。高3については、あるタレントが海外の児童養護施設を訪れた際のドキュメンタリーを見て、彼の心の動きと実際に取った行動から、「超越性」をキーワードに広い意味での宗教の役割を考えるとところから始めます。そして、聖書の使信を現実世界に近いところで考えるという狙いから、生命倫理の課題をいくつか紹介し、それについてキリスト教倫理の観点から応答することを通して、大人への入口に

学びが生かされて、ウイリアムズ主教の教え『道を伝えて、己を伝えず』が体现されていくことを祈ります。

香蘭女学校中学高等学校

坂根 久仁子

中高一貫教育の香蘭女学校では、中教科1年から高等科3年までの6年間、週1時間の聖書の授業があります。カリキュラムとしては、中等科の3年間は「聖書」という科目名で、1年生はキリスト教入門、2年生では旧約聖書、3年生では新約聖書の内容を学びます。高等科になると、1年生では「旧約聖書」、2年生では「新約聖書」、3年生では「キリスト教」を必修科目として履修します。

入学して初めて聖書やキリスト教に触れる生徒が多く、1クラス43人の生徒のうち、信徒は1人いるかないかです。教会の幼稚園や保育園、キリスト教の小学校に通っていた生徒が各クラスに数名ずついます。

香蘭では毎朝、全校生徒が礼拝堂に集まって始業礼拝をしています



が、その礼拝でお祈りする言葉も、中教科1年の生徒たちにとっては初めて聞

立っている彼らが、自らの生き方を考える気づきを得る機会となることを願っています。

学校の聖書の授業は、教会の説教と異なり、聞く側が狭義の「信仰」を持っていくことを前提としません。これは、「限界」であり「制約」であるとも見えるでしょうが、前任校を含め学校現場で10年あまりを働いてきたわたしとしては、むしろその中に多くの可能性や希望を見いだしています。人生の中でその人が洗礼を受ける、受けられない関わらず、聖書のメッセージを胸に秘めた多くの卒業生たちが社会のそれぞれの場所で生きているというビジョンは、「教会」を画期的に広げていくのではないのでしょうか。

立教女学院中学高等学校

宗教主任 大内 麻理

これまでの立教女学院中学高等学校の歩みにおいて、歴代チャブレン、校長、宗教科教諭が聖書科(宗教科・キリスト教科)の授業を担当してきました。そのことに感謝をして、今の女学院がキリスト教信仰に



浅草聖ヨハネ教会で給食活動をする学生たち

く言葉なので、1年生の最初の授業は礼拝式文の解説から始めます。その後イエス・キリストが生きた場所や時代などについて学び、誕生の物語、十字架と復活の出来事を中心に、イエスの生涯を知っていきます。中教科2年生、3年生では聖書の物語を読み、メッセージを読み取っていきます。高等科になって聖書を読み、それらの物語の今日的意義を探っていきます。高等科3年生の授業では、5年間学んできた聖書やキリスト教の視点を土台にして、いのち、平和、人権などの問題について考えていきます。

昨年度、中教科3年生3学期の授業で、マタイによる福音書第14章22〜33節「湖の上を歩く」を読み、そこからどのようなメッセージを読み取るか、3年生の生徒に考えてもらいました。まずは自分なりに読み、それからグループで自分なりの解釈を発表しあってディスカッションし、それをクラス全体でわかちあいました。そのときの生徒たちの解釈には、神学者も顔負けの素晴らしいものがありました。そのいくつかを紹介したいと思います。

「信仰」とは何か

自分が大切だと確かに言えるものから受け取った知恵、知識をもって生きてい

基づく教育を行なうことを大切にするためにも、日々の礼拝・課外活動(本校では土曜集会とボランティア活動)・聖書科授業はいつも関わりをもって行なわれています。また、その授業を共に豊かな体験の場として展開するために、各学年では修養キャンプが行なわれています。

長年、キリスト教科と呼んできた教科名は、数年前から聖書科(科目)・宗教科(教科)と呼ぶようになりました。それはこれまで、本校が神の御言葉を中心にしながらも、キリスト教の礼拝と歴史、信仰と文化をより大事にしてきたことを意味しています。また、具体的には①聖書を学ぶ、②人間とは何者かを問う、③いかに生きるかを考える、この3つを中高6年間の学びの目標としています。中学では授業の始めに1分間黙想をして強い心を育てます。次に10分間読書。これは生きることを考えるための力になります。毎時間テーマをもとに質疑応答、話し合い、振り返りと分かち合いを中心とした授業が行なわれます。では、各学年の授業カリキュラムをご紹介します。思います。

・中学1年 キリスト教入門(祈り・チャペル・ウイリアムズ主教・教会暦・教会訪問)〈中学2年 新約聖書入門(中2キャンプ準備「劇作り」・修学旅行準備「日本キリスト教史」)〈中学3年 旧約聖書

・何があっても揺るがない心をもつこと。

・不可能を可能にする強い意志。

「湖の上を歩く」を読んで

・私たちがいま過している1秒1秒は、誰も次に何が起るか予測できない未来であり、水の上を歩くように不安定だが、一歩踏み出すための足場は自分の心の強さ次第で決まるということをこの箇所から学んだ。自分が決めた道を、前に一歩踏み出すことを、他人(世間)によって左右されないために、自分の力を信じて行動したいと思った。

・今を生きているということは、常に新たなチャレンジであることを知り、不安があっても目を背けず、周りの人々との関わりを深く理解し、向き合うべきだと感じた。・イエスが、沈みそうになったペトロに手を伸ばしたのは、決して甘やかしているわけではなく、一人で歩いて行くことの手助けをしているのだらうと思ひ、私も誰かのそのような存在になっ

ていられるような人になりたいと思った。

ペンテコステを迎え、使徒たちがそれぞれ言葉で語っていったように、私たちもそのような働きをしていけるようにという思いを新たにします。生徒たちと共に聖書を読むこともまた、そのような思いを新たにする経験となっています。

司祭と語ろう (その10)

司祭 笹森 田鶴

今回は、聖アンデレ教会と小笠原聖ジョージ教会(管理)で司祭されている笹森田鶴司祭に、信徒の鈴木さおりさん、鈴木茂さんからお話を伺っていただきました。

まずは先生の喜怒哀楽をお聞きしたいのですが。

笹森 いきなりですか。(笑)

先生が聖職になって一番嬉しかったことは何ですか。

笹森 うーん、教会が出来ることかなあ。楽しいことも同じですね。

一番怒ったこと、哀しかったこと何でしょう。

笹森 ありますけど、何が一番かというのはすみませんうまく答えられなくて。

それでは、自分の好きなところ、嫌いなところは。

笹森 好きなところは脳天気なところでですけど(笑)、逆に見ると思慮深くないともいえるので、そこが嫌いなところ



かなあ。
それは謙遜でしょう、あとリフレッシュにはどんなことをしていますか。
笹森 車の運転はリフレッシュになります。音楽を聴くのも好きです。
好きな聖歌とかありますか。
笹森 聖歌も聴きますが、忌野清志郎もよく聴きます。意外ですね。では牧師になっていなかったら、どんな仕事をしていたと思いますか。
笹森 もともとは聖書科の先生になりました。



それはどうしてですか。
笹森 実は、大学受験に失敗して、諸般の事情で東北学院大学のキリスト教学科に入ったんです。でもそこで社会と密着した神学を学び、卒論の時も私が他に考えていたテーマを、恩師といえる浅見定雄先生が「あなた

の問題から逃げてはいけない」と言って「女性神学」を勧められました。
それが先生の今の原点になってるんですか。
笹森 そうですね。はじめはその意味が分からなかったのですが、女性たちの生き様や悲しみに触れる機会があつて、神学の面白さにも気付きました。特に聖書の女性たちの物語は面白く、是非これを女子学生に伝えたいと思い、聖書科の先生になろうと思つたんです。
でもそこから東神大に行きましたよね。
笹森 それは聖書科の先生になるために入りました。

では声が聞こえたというか、召命を感じたのはいつでしょうか。
笹森 声が聞こえたわけではありませんが、大学院の時に1年間休学してフィリピンに行ったことが大きなきっかけでした。神の正義と平和を求めて生きている人たち、特に教会の活動を地域のコーディネーターなどの女性たちと出会ったことが大きいです。

しかもその人生はバラエティーに富んでいて、その人生にキリストを通して触れさせていただけというのとはとても光栄なことです。
先生のようが良い働きをしています。いまだに女性司祭に反対の人がいることをどう思いますか。
笹森 聖公会というのは幅があります。だから違う意見の人がいていいんです。みんな同じという点でひとつになる必要は無い。しかし、その幅の中で、むしろ排除しあわないことが大事なんです。



そのうち女性司祭の女性という文字がとれるといいですね。
笹森 今の子どもたちは、すでに私のことを「女性牧師」とか「女性司祭」とは思わずに、普通に司祭、牧師と思つていますから希望はあります。
これからの先生のお働きに期待します。今日はどうも有り難うございました。

その頃はまだ女性司祭が認められていなかったですよ、ねにも拘わらず、その道を志したわけですね。
笹森 実現できるかどうかよりも、一生待とうという思いで志願した記憶があります。
だから、先程の質問の嬉しいこと、楽しいことではないですが、今、教会でできることがものすごく幸せで「神さまいくらでもどうぞ私をお使い下さい」という感じです。そうだ、悲しいことといえば、やはり時間的、空間的な制約の中で訪問できないという信徒さんが沢山いらっしゃるということでしょうか。
そういう意味でも、先生は牧師であるという意識が違うような気がします。喜んで教会をしている。

司祭方はみんなそうだと思いますよ。
東北教区の司祭でいらしたお父様の影響もありますか。
笹森 それはないかなあ。父はむしろ女性司祭には反対でしたから。それに本来、私は人前で話すことと文章を書くことが苦手なんです。東北の文化や習慣で育った私は表立って何かをす

ることに慣れてない。だから説教や文章を書くことに、ものすごくエネルギーを使うんです。
ただでさえ、女性司祭というプレッシャーがあるのにね。
笹森 候補生の頃は確かにしんどくて、何回もやめようと思った時もありましたけど、今となつては帳消しですね。いや上回つてますね、教会できるという喜びの方が。それにプレッシャーという意味では、男性と違ってモデルがない分、楽だったかもしれないません。男性だと牧師はこうあるべきという理想の牧師像と比べられて大変ですけど、私達にはそれがなかった。
教会をしていて、何が一番喜びを感じますか。
笹森 なんととっても、その人の人生の大切な場面に立ち会わせていただくということですね。まさに喜怒哀楽の場面ですね。

「司祭のこの一冊」

「なぜ私だけが苦しむのか」

現代のヨブ記

H・S・クシュナー著
岩波書店・1998年刊

司祭 廣澤 敏明

この書物は、「なぜ、善良な人が不幸にみまわれるのか」という永遠のテーマについて、一人のユダヤ教のラビ(教師)が、難病の息子の苦しみとその死に向かいあう中で記した魂の葛藤と神についての省察の記録です。
私が、この本に出会ったのは、60歳の時、牧師になって間もなくの頃だったように記憶しています。著者の「神は万能ではない」「神でもできないことがある」という言葉に強く揺すぶられました。
牧師になって直面したのは、「なぜ、ほかの人ではなく、自分がこのような苦しい目、悲しい目に遭わねばならないか」という問いかけであり、私の言葉がその人の心に届いていないというもどかし



息子は14歳で死にます。
彼は、苦しみに苦しんだあげく、「神は万能ではない」という考えにたどり着き、やっと安らぎを見出すのです。息子の病を引き起こしたのが神でないことに納得できたからです。そして、人間の力や勇気が限界に達した時、思いがけないことが起こる。あれほどの苦難に打ちのめされていた人が再び立ち上がり生きていく、これこそが奇跡であり、神の働きであることに気づくのです。

さでした。
著者は、可愛い盛り(3歳の息子が、「早老病(プロゲリア)」と診断され、身長は1メートルどまり、頭や体には毛もはえず、子供のうちから小さな老人のような容貌を呈し、十代のはじめに死ぬだろうという宣告を受けます。彼は、ユダヤ教からも他のどの宗教からも慰めを得られませんでした。医師の宣告通り、

第2次世界大戦中ドイツのナチによつてユダヤ人が大量虐殺されたことは歴史的事実である。それゆえに戦後世界各地からユダヤ人が聖地に移住し、社会主義的な理想をもつてキブツを作り、新しい国作りをしていると知った時、私はそれを喜んだ。神がアブラハムに約束されたことが成就した、あの土地はもともと神がイスラエルに与えたものだったと思つた。
こうした受け止め方は、私個人に限らず、世界の教会の多くのの人々共通の思いではなかったか。しかし旧約聖書の記述を、何千年もの時の経過や社会状況を無視して、即現代に当てはめる事が許されるものなのだろうか。「2千年前までは、あの地はユダヤ人のものであった」などという主張が、現代社会で通用するだろうか。(2千年前日本は弥生時代だった!)

《聖書を開いて》 ⑬

パレスチナの友が教える

旧約聖書の読み方 (1)

司祭 神崎 雄二

千年前にはすでにアイヌ民族が北海道に生活していたことが知られているが、その事実のゆえに「北海道は自分たちの土地だ」と言つて現代に武力で土地を占領することなど考えられもしないが、第2次世界大戦後ユダヤ人はそれを行つた。世界の教会もそれを容認した。それは旧約聖書の記述を即現代社会に適用することの誤謬に気付かなかつたからである。そんな逐語霊感的な旧約聖書の読み方・受け止め方とは決別しなくてはならない。

聖書は、古代イスラエルの民の中で、何千年もの間に生じた出来事を、イスラエルの民がどう理解したかを記したものである。それゆえにその物語や言説が生まれてきた社会状況や歴史状況を十分吟味し、その状況の中で生きた捉え方をしない限り、神の言葉とは成らない事を心に留めたい。(次回に続く)

私たちの教会 [12]

ようこそ聖パトリック教会へ



毎週・火曜日と木曜日、聖パトリック教会は子どもたちの声で賑わいます。ホールも2階の部屋もお庭も…。リトミックとピアノを中心としたエンジェル音楽教室は、今年31年目に入りました(教会は今年で57年目)。近隣の方だけではなく、自由が丘や鷺沼、そして長野からも、この立川まで通っていらっしやいます。教会が運営するこの音楽教室は、他の音楽教室と違うところがたくさんあります。

まずは、2才児と保護者のための「ぼかぼかクラス」・このクラスはリトミックを中心としたクラスですが、「たなばたまつり」「おにいさん、おねえさんと一緒にのクリスマス会」「おにたいの日」「ひなまつりコンサート」〜ひしもちサントを作ろう〜等々、保護者の方が子どもと一緒に楽しむプログラムが目白押しです。「夏休み集中レッスン」の時は、リトミッククラスの高校生や中学生の生徒さんたちが中心になって、いろいろ

な時間の流れがあります。そこは、何かと出会うことや何かに触れること、そして何かを感じることで『向き合う』ための恵みに満ちた環境です。

私たちは3泊4日を通して『向き合う』ことを大切にしている。向き合うことを大切にしている。向き合う方も、向き合っている方も、興味のない方も、この夏一緒にじっくりと『向き合う』時を過ごしてみませんか。

※詳細は各教会にお送りした「中高生キャンプニュース」をご覧ください。

今年で3回目となる合同子どもキャンプが、清里フォレスト・キャンプ場で7月29日から31日の日程で行われます。昨年はスタッフ、子ども合わせて44名が参加し、楽しく有意義なキャンプを行うことが出来ました。

立教諸聖徒 山崎健吾



元気いっぱい！仲良し小学生クラス

クリスマスコンサートでハンドベル演奏

信徒・エンジェル音楽教室主催者 馬淵悦子

とが、教会が携わる音楽教室の一番大切なことではないかと思っております。

《信徒リレーエッセイ》
鮭が川に帰るよう

聖教主教会 白濱 智子

3月末の主教巡回日、当教会では新中学生、小学校高学年生ら4名の堅信式が行われた。皆信徒の子弟で、幼児洗礼からSSを経て、堅信式へと進んだ。当日は4名の教父母、両親、祖父母らで礼拝席は満員。教会にとって嬉しい1日となった。

しかし喜んでばかりはいられない。子供たちは中学入學と同時に教会から遠のいていく。部活、受験等々学校優先の生活が、子供たちが教会へ通うことを困難にしている。堅信を受ける年頃というのは、逆に教会から離れていく年頃でもある。牧師の子弟といえども例外ではない。

この先子供たちが進学、卒業、就職、結婚など人生の節目に教会が関われるように、そして大海へ放たれた鮭がやがて生まれた川に帰ってくるように、教会へ戻ってくることを願っている。

中高生キャンプ

テーマは「向き合う」

私たち中高生キャンプ準備会は、今年度も東京教区の中高校生を対象としたキャンプを開催します。

日程は8月18日(月)から21日(木)までの4日間、場所は日本バイブルホーム(群馬県利根郡みなかみ町) 参加費は2万5千円(兄弟割有)です。

今年度のキャンプのテーマは『向き合う』としました。日常から離れ、自然豊かな環境での祈りをもったキャンプには特別

前期信徒黙想会

講師の講話に感銘

今年で4年目を迎えた聖職養成委員会主催の前期信徒黙想会が5月17日(土)、ナザレ修女会で行われ、16名が参加した。

今年のテーマは「牧師の仕事〜生活・祈り・喜び」。講師は前京都教区主教 武藤六治師。

武藤主教は「聖職として恥の多い生活であったが、それなりに楽しく、生まれ変わったままに聖職を志望したい、でも主教にだけはなりたくない(笑)」とご自身の聖職生活を振り返って

な時間の流れがあります。そこは、何かと出会うことや何かに触れること、そして何かを感じることで『向き合う』ための恵みに満ちた環境です。

私たちは3泊4日を通して『向き合う』ことを大切にしている。向き合うことを大切にしている。向き合う方も、向き合っている方も、興味のない方も、この夏一緒にじっくりと『向き合う』時を過ごしてみませんか。

※詳細は各教会にお送りした「中高生キャンプニュース」をご覧ください。

今年で3回目となる合同子どもキャンプが、清里フォレスト・キャンプ場で7月29日から31日の日程で行われます。昨年はスタッフ、子ども合わせて44名が参加し、楽しく有意義なキャンプを行うことが出来ました。

立教諸聖徒 山崎健吾



た後、「聖職になるのは、その人の能力や知識によってではなく、神の働きと恵みによってであることを先輩司祭から教えられ、それを実感した」といわれた。

また、信仰の図式は「あなたが生かされた場所を選んだ」ではない。わたしがあなたがたを選んだ(ヨハネ15:16)とあるように、人間の側が神に働きかけてなるのではなく、神の愛と慈しみが先にあつて、それに人間が応えていくものである。神の方から自分自身を呼んでくれる。一人一人がかけがえのない人間として呼ばれている。それが信仰である。」と話された。

さらに「私は清里聖アンデレ教会での生活が長かったが、朝夕の礼拝前に鐘を鳴らすときは、村人全体のことをも覚えて祈っていた。教会は地域のため

特に初日のカルタ作りは、子どもならではの面白い発想のカルタが沢山あり、帰りの日はカルタ大会で盛り上がりました。

また、キャンプ・ファイヤーでは子どもたちが班で相談した出し物やスタッフが行った「よきサマリア人」のスタンツが最高に面白かったです。

キャンプでいつも思うのは、子どもたちは、仲間と一緒にのびのびと自然の中で交わり、本来のパワーが発揮されるということ。また親から離れることによって、互いに協力

し合い、大きい子は自然と小さい子の面倒をみるようになります。そのような子どもたちの持つ優い一面、意外な一面を見られるのもキャンプならではの、たった3日間ですがひとつ成長した姿を私たちに送り出して下さい。

日曜学校スタッフ連絡会 渡辺康弘

今回は、昨年以上に楽しいプログラムを考えていますので、どうぞお子さんをキャンプに送り出して下さい。

聖職の仕事に関心のある人、将来聖職への道に進もうとしている人を主たる対象として発足したこの信徒黙想会からこれらの人たちに続く人たちが神のお恵みによって与えられるよう聖職養成委員会では祈っている。

なお、後期信徒黙想会は、10月12日(日)から13日(月・休)の1泊2日の日程でイエズス会「黙想の家(練馬区)」で開かれる予定。(取材・広報委員会)

『聖地ろっあ子どもの里』

創立50周年式典に参加

吉松さち子

ヨルダンの首都アンマンから北西40キロのサルトという町に、

聖公会エルサレム教区が1964年に設立した耳の不自由な子ども達の施設



子どもの里の子供たち

「聖地ろっあ子どもの里」があります。今年創立50周年を迎え、記念式典（4月12日～14日）が開かれたので出席しました。ここでは3歳から18歳までの子ども達150人（うち盲聾哑の子どもが11人）が寄宿生活をしています。幼稚園から高校まで普通の学校と同じ教科を手話を用いて教えています。コンピューターの使い方方も学んでいます。また、自動車修理、家具製作、織布、刺繍等卒業後に備えた職業訓練にも力を入れていきます。補聴器の研究・開発は中東でも有数のレベルにあるということなのです。

この施設との関わりは、2007年にエルサレム教区ダワーニ主教の着座式で、神崎雄二司祭が施設長のBr.アンドリューと面識を得た時に始まりました。以来エルサレム教区協働委員会が3回ボランティアを派遣し、交流を深めてきました。

式典には、ヨルダン王国王子、国会議員、サルト市長、教職員、卒業生、父兄、イギリス、スイス、ドイツ、オランダ等の支援国代表、聖公会司祭などおよそ650人が出席、日本からは、私のほかに浅見国貴（聖マルコ教会）、光益彰・かおる夫妻（横浜山手聖公会）、村上喜代子（大阪・石橋聖トマス教会）の諸兄弟、以前ボランティアに参加したことのある手芸作家の宝田ひかるさんの5人が参加しました。

4月11日は、校内施設の見学、子ども達との交流が行われ、ゲームやマジックショーなどいろいろな遊びを楽しみました。

翌12日には参加各国の代表による会議が開かれ、各国が資金集めにどんな工夫をしているかが報告されました。日本でも委員会を立ち上げてほしいという要請を受け

ました。

記念式典参加にあたりサラーム・パレスチナ、日本聖公会婦人会・前田伸子会長、「一粒の麦」の被献日礼拝献金、施設の子どもの里親になっている人たち、宮脇博子さん（聖愛教会）から預かった計4500ドルを献金し、Br.アンドリューから感謝とお礼の言葉をいただきました。

また、古谷善子さん（真光教会）に書いていただいた「祝聖地ろっあ子どもの里設立50周年記念」という大きな書が記念式典会場に



日本からの参加者

掲示されました。

記念プログラムとして、手話教育者研修施設や各所にある分園訪問、モーセ終焉の地ネボ山やヨルダン川の洗礼者ヨハネに

よるイエス洗礼場所、ジェラシユ等の聖地旅行も生まれ、多彩な記念式典でした。ヨルダン訪問は初めての人もあり、ペトラ遺跡にも足を伸ばしました。帰途、友人でアンマン在住のジョージ・コプテ

イ司祭の案内でシリアからの難民施設を訪問しましたが、みんな胸の痛む思いでいっぱいでした。

2012年に来日されたBr.アンドリューからは「日本のみなさんにくれぐれもよろしく伝えてください」とのことでした。



今回の特集は「聖公会ミッシン・スクールの授業」ということで各学校の先生にお願いしましたが、最近ではミッシン・スクールとは言わず「キリスト教学校」、聖公会では「聖公会関係学校」を使っているという指摘を受けました。やはり学校でミッシン（宣教）という考え方が難しい時代なのでしょう。 ※原発Q&Aはお休みします 次回夏号 7月27日発行予定

編集後記

ちょっと聖書、ときどきユーモア（十三）

1. 炎のようなもの

教会学校の先生「聖霊降臨日には大きな音がして、炎のようなものがそれぞれの弟子達の頭の上にとどまると聖書に書いてあります。みんなは、その時いったい何が起きたと思いますか」 子ども「はい先生、たぶん、雷が落ちてみんなの髪の毛が燃えたんだと思います」

2. 漁師から見た聖書

牧師「イエス様は網を洗っていたペトロたちに、もう一度沖にこぎ出して網をおろしなさいと言いました。ペトロたちがそのとおりにするとおびたたい魚がとれました。そして、ペトロは最初の弟子になったのです。この聖書の話聞いて漁師であるあなたはどう思いますか」

漁師「とつてももったいないなと思いました」

牧師「どうしてですか」

漁師「私だったらイエス様の弟子になるより、逆にイエス様を漁師の仲間にかウトした方がはるかに稼げるのと思いました」

3. 罪をゆるす権威

牧師「イエス様はこの世で罪をゆるす権威をもっておられます」 信徒「先生、私の場合、もう一人罪をゆるす権威をもっている人がいます」 牧師「ほう、それは誰ですか」 信徒「うちの女房です」